ありば ヒューマンドキュメント

「音色はもちろん、音域の広さやメロディも伴奏もできる多様性、音楽ジャンルを選ばないオールラウンドプレイヤーなところがクラリネットの魅力です」

クラリネット奏者

[久木田 愛]さん

難病を乗り越えて音楽コンクールでダブル受賞

正確で繊細な動きと感性が必要とされる音楽家に多いともいわれる難病のひとつ「フォーカル・ジストニア」。2020年1月に開催された「第25回KOBE国際音楽コンクール」の木管楽器C部門(大学・一般)において、病を乗り越え、最優秀賞と兵庫県知事賞のダブル受賞を果たしたクラリネット奏者の久木田愛さん。美しい音色とダイナミックな音楽的表現を評価されての受賞でした。久木田さんがクラリネットを始めたきっかけは、高校の吹奏楽部の顧問をしていた母親の影響から。3歳の頃から練習についていき、遊び感覚でクラリネットに触れていたとか。小学3年生で吹奏楽部に入部、6年生のとき出場したソロコンクールでは最優秀賞を獲得しました。やがて、松陽高校の音楽科に進学してクラリネットを本格的に学ぶことに。「周りは小さいころから音楽の英才教育を受けてきた人が多い中、私は楽譜も読めず、ピアノも弾けずという生徒でした。でも、やればやるほどクラリネットという楽器の面白さに惹かれました」と話す久木田さん。音大を目指して勉強する中、海外への思いが強くなり、県立短期大学に進んで英語の勉強を始め、その頃クラリネットは趣味程度だったといいます。

「病気を前向きに捉える」できない自分を受け入れること

久木田さんのクラリネットへの思いが再燃したのは、小学校時代の尊敬する先生との再会からでした。東京まで月1回レッスンに通い始めるうちに、「高校時代の友達が活躍している姿を見て、上手くなりたい、もう一回頑張りたい、と思うようになりました」。そんな久木田さんを病が襲ったのは3年前の春のこと。ストレスを感じる日々が続く中で、指を動かすと違和感を覚え始めたそうです。右手の薬指と小指が動かしづらくなり、日常生活においては難なく行えることが、クラリネットを吹くときだけ動かないという状況に。「病院では原因が究明されてない難病と診断され、練習するほどできなくなるジレンマとの闘いでした」と当時を振り返る久木田さん。同じ病を抱えるプロの音楽家をはじめ、さまざまな人がメンタルな部分も含めて支えてくれたことが、前へ進む原動力になったといいます。「できない自分を受け入れるのも大事、前向きに病気とつきあっていこうと思えるようになりました。病気は自分自身だけでなく、音楽まで変えてくれた。」と今ではそう捉えられるまでに。「これからは、海外のコンクールも視野に入れながら、子どもたちへ自分の経験を還元したい、育てたい」と夢が膨らみます。

木管楽器C部門（大学・一般）の参加者75人の中から、見事最優秀賞と兵庫県知事賞を獲得